天からの光

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天からの光

【Ｎコード】
Ｎ６６１７Ｕ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
全てを終え、世界が平和になって勇者は村に戻ってきた。
そこで迎えたものとは。

※ｄノベ転載

俺は帰ってきた、自分の故郷であるこの山奥の村に。
皆の敵であるピサロを倒して。
仲間達は嬉しそうに自分のいるべき場所へと帰っていった。
俺も同じように自分の帰る場所にいるというのに、心は晴れない。
ロザリーの死は残念であったし、そこから、ピサロの背景も見えてくると、ただ単に倒したからと言ってすっきりしない。
何より、敵を討ったからといって、亡くなった人が帰ってくるわけじゃない。
今目の前に広がる景色も、あの時焼かれた村のままだった。
俺の足は自然と、よくシンシアと一緒にいた花畑へ向かっていた。
前は色とりどりの小さな花達が咲いていたが、今はただ焼けた草があるだけだった。
少しだけ他より高い所にあるそこまで来て、俺は立ち止まる。
そこからは、村の様子がよく見えた。あの時も。
ふと、頬に伝う何かを感じた。
軽く頬に触れると、指先に湿った感触がした。
それが何か確認すると、後から後から熱い雫が目から零れ、頬を濡らしていった。
俺は思わずその場にうずくまるように膝をついてしまった。
誰が見ている訳でもなかったが、長い旅で身についた癖で、自然と嗚咽を噛み殺していた。
そうしていると、ますます無くしたものは戻らないのだと実感してくる。
シンシア……シンシア……シンシア――――！
ただ君に会いたい。

一度でもいいから、君と言葉を交わし、君に触れたい。
想いは募るばかりだった。
ふと、俺は周りが妙に明るくなっていることに気づいて顔を上げた。
すると、天から一筋の光が俺の上に差していた。
そして次の瞬間、光の強さが増したかと思うと、懐かしい匂いに包まれた。

「シンシア！」
「――――ユアン！」

光の中に彼女がいた。
光を纏って降りてくるシンシアが、笑顔で俺の名前を呼んだ。
俺は迷いなく彼女に近寄り、その体を抱き締める。
しばらくそのままでいて、不意に後ろから、ヒューという口笛の音が聞こえ、俺は慌ててシンシアから離れ、後ろを振り返った。
すると後ろには、今まで一緒に旅をした仲間達がいた。
口笛を吹いたのは恐らくマーニャだろう。
ミネアが苦笑いを浮かべる横で、マーニャがニヤニヤを笑っているのが見えたからだ。
アリーナも、クリフトも、ブライも、ライアンも、トルネコも……皆笑顔でそこにいた。

「何で……」
至極当然な疑問を俺は口にした。
が、その俺の口にシンシアは人差し指をあてて制した。
俺は何も言えなくなった。

「全ては天のお導き」

シンシア自身の口元にも、俺の口を押さえていない片手の人差し指を当てて、静かな優しい声でそう言った。
それだけで、俺は何となく色々なことがわかった気がした。
シンシアはそっと唇に当てていた手を両方離した。

「ユアン、あなたはこれで本当の勇者ね」
シンシアは、今度は俺の手を取ってそう言った。

俺の胸に、その言葉は深く染みた。
全てが正しかったとは言えない。無くしたものもある。
だが俺は、目の前にシンシアがいるだけで十分だった。
今までの俺の旅が報われたと思った。

光は優しく俺たちに降り注いでいた。

ＲＡＮ　＊＊＊２００６／９／４＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6617u/

天からの光

2011年7月8日12時52分発行